

# TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌



## 特集 題材を重視した指導

特集

巻頭エッセイ  
絵を描くことと対話 ..... 小田島 等 01

英語教育と題材 ..... 高橋貞雄 02  
推論発問でメッセージを読み取らせる ..... 田中武夫 06  
グループワークで題材の理解を深めよう — TBLT 理論のすすめ ..... 山本崇雄 08  
題材を掘り下げる指導 ..... 西村秀之 10

連載

英語教師のための基礎講座 英語学習の *Doing, Feeling, Thinking* (3) ..... 竹内 理 12  
評価クリニック 「わかること」から「使うこと」への変化とその評価 ..... 根岸雅史 14  
授業レポート ICT と英語の授業 (1) フラッシュカードと語順の理解 ..... 杉本 薫 16  
小学校英語 Just Now 小学校におけるフォニックスの指導  
— 音にする力を楽しくつけるために ..... 井村 晃 19  
単語の文化的意味 79 uncle / aunt ..... 森住 衛 21  
Essay Detective or Good Communicator? ..... Michael Carr 22  
英語教師のリソース 「ピクチャーカード」を使ってみよう ..... 日臺滋之 23

AROUND THE WORLD 失われていくものと残したいもの (アラスカ・エスキモー) [4] ..... 田村幸誠 表紙裏  
表紙写真について 空から望むエスキモーの村 ..... 田村幸誠 表紙裏

Vol.22

SPRING 2012  
SANSEIDO

## イヌイト、それともエスキモー？

以前、アラスカ、フェアバンクス<sup>フェアバンクス</sup>の街をエスキモーの友人と歩いていた。友人は、「大学を卒業したら村に戻って小学校の先生になり、エスキモーの伝統を村の子どもたちに教えていきたい」と目を細めながら優しく話していた。私も彼の話をしっかり覚えておこうと懸命に耳を傾けていた。そのとき、前から野球帽を斜めにかぶり、いわゆる「ラッパー」のようないでたちをした青年が歩いてきた。絶対にぶつからないようにとよけたその場に、青年は立ち止まった。そして、友人が一言、「紹介するよ、僕の弟。」私は一瞬、訳がわからなくなった。確かによく見れば顔は似ている、しかし、雰囲気、話し方、身振りがまるでその友人と違うのだ。私たちはぎこちない挨拶をかわすと、弟は小刻みにリズムを取りながら歩き去った。「弟!？」と、目を白黒させながら聞く私に、友人は、「あいつは、エスキモーじゃなくて、アメリカ人として生きるって決めたから」と答えた。

日本でエスキモーということばを使うと、ときどき怪訝な顔をされ、「正式にはイヌイトですよ」と返されることがある。私がエスキモーという呼称を使うのは、例えば、先の友人はエスキモーだけれど、イヌイトではないからである。エスキモーは、シベリアからアラスカ・カナダ、そしてグリーンランド東沿岸にかけてのツンドラ地域を居住域としてきた先住民で、アラスカの北西部を境に、ユピック(西側)とイヌイト(東側)とい

う2つのグループに分かれる。1970年代のカナダで、自分たちの呼称をインディアンのことばに由来するエスキモーではなく、自分たちのことばで「人」を表すイヌイトにしようという運動が起き、正式に認められた。日本でエスキモーという呼称が避けられるのは、このカナダでの運動の影響によるものと考えられる。しかし、アラスカのように2つのグループが存在する地域では、イヌイトということばをエスキモー全体の呼称とするのには抵抗があった。さらに、エスキモーということばの語源として定着している「生肉を食べる輩」は、実はインディアンのことばで「雪靴を編むもの」の意味であることも判明した。アメリカでは今でもEskimoということばは公的な場でも用いられ、またユピックやイヌイトも、日常のやり取りの中でエスキモーということばをふつうに用いる。

しかし、一歩踏み込んで彼らの心のうちを聞くと、人それぞれの思いがあることがわかる。過去に差別された経験、村から街に出た経験、歴史を勉強した経験、民族という意識の強さ、世代の違いなどから、同じユピックでも、ユピックと呼ばれたい人、エスキモーと呼ばれたい人、さらにはイヌイトと呼ばれたい人など、さまざまである。エスキモーは笑顔の絶えない少数民族と言われる。しかし、他者と接するとき、彼らのアイデンティティは心の中で絶えず揺らいでいるのである。

### 表紙写真 について

## 空から望むエスキモーの村 An Eskimo Village from the Air

田村幸誠



エスキモーといえば、沿岸部に住み、クジラやアザラシを捕獲しているイメージが強いが、内陸部でカリブー(野生のトナカイ)などを捕獲しながら移動生活をしてきたエスキモーもいる。この写真はそんな内陸エスキモー(ヌナミウト、意味は「内陸の民」と呼ばれる人たちが定住して作った村を飛行機から写したもので、この村のDebbie Mekianaさんからいただいたものである。アナクトゥービック・パスと呼ばれるこの村は、ブルックス山脈の北側にあり、人口は300人ほど。村へは

アンカレッジから2時間かけて、10人乗りの小さな飛行機で向かう。飛行機はアラスカの美しい大自然を眼下に進むが、小型飛行機ゆえ、少し天気が悪いと飛行機は揺れに揺れる。そして最後は、airstripと呼ばれる砂利の短い滑走路に着陸する。移動生活はしなくなったものの、現在でも昔ながらの生活が数多く残っている。雪が溶けた夏には、女性はベリーやユリ根をとり、男性はハンティングや鮭漁に出かける。薪を集めたり、氷を溶かして水を作る光景も村ではまだ見られる。秋になり

夜が長くなると、オーロラが空一面にまるで踊りうねっているかのように広がる。村では、都会とは全く異なる時間の流れを感じることが出来る。その反面、電気と高速インターネットが全世帯に行きわたっている。家の中では、子どもたちが任天堂のWiiで遊んでいる。エルダーとよばれるお年寄りが携帯電話で楽しそうに、エスキモー語で別の村の友人と話している。その光景を見て、先のDebbieさんが「エスキモー社会とアメリカ社会、2つの世界の最高のコラボね」とおっしゃった。



## 絵を描くことと対話

小田島 等 Odajima Hitoshi

絵はいつから「独りで描くもの」になったのか？ということをよく考える。「絵」の歴史を振り返ると、宗教画は集団で作られていた。その頃は、「神的」なるものに、一度、どのような絵や像を創るべきかと申し立てをし、制作が執り行われていた。一つの法の下で絵が集団で描かれていた。このほかに集団で描かれるタイプの絵と言えば、ヒップホップ音楽になくてはならないグラフィティと呼ばれる落書きがある。70年代末、ニューヨークの黒人たちの、たゆまざる新しい遊びから誕生したものだ。重低音のビートに酔いしれ、スプレーで街の壁や地下鉄等に軽やかに描かれた。ほかに思い当たるのは、ピカソやモディリアーニらが住んでいたパリのアパート、洗濯船だ。皆で互いの絵を品評しながら、めったにお目にかかれぬ真摯な絵を描いていた。コクトーやアポリネール、マティスらも遊びに来る溜まり場。この頃はもう自分の絵は自らが仕上げているのだが、「お前がこうするなら俺はこのスタイルでいく」というような健全なライバル関係の中で、互いの作家性を鍛えあっていた。我が国における漫画のトキワ荘も近いものだったろう。トキワ荘の場合は、互いの原稿を手伝いながらの作業だったと伝え聞く。

僕はずいぶんと長い時間、独りで絵を描いてきた。デザインやイラストレーション、漫画等も数多く制作してきたのだけれど、たいがい独りでの作業。コレが、とても「サミシイ」時間だった。と言っても、サミシク感じ出したのはここ最近のこと。それまでは独りで絵を描くことは当たり前だと認識していたので、別段に孤独も感じなかった。そこへ、あるキッカケがあり「あれ？独りで描いてきたのはなぜだろう？」と、通常化した習わしに違和感を感じるようになった。

そのキッカケとは、友人の画家、齋藤祐平が主宰する「間欠泉」というお絵かきイベントへの参加だった。教室などを借り、皆でお絵かき大会の体で行う自由なイベントだ。そこでの体験は僕にとって新鮮だった。会場にはDJがいて、ほどよい音量で音楽が鳴り、色々な描き手に出会い、話し、お互いの絵を交換しながら描いたりしていた。画家、イラストレーター、学生と参加者は様々。夕方になるとメンバーの誰かがご飯を作り、皆でそれを食し、完成した絵について講習会をする。

鶴の恩返し的な、密室に独りこもりシコシコと制作する「孤高の作業」によって生まれた絵が鑑賞者の胸を打ち、それが至高と語られるのはよくわかる。これは、ゴッホ・コンプレックス的な王道なのだが、それ以外にも道はあったのだ。この「間欠泉」に参加し、認識を新たにしたい。なぜこんなに簡単に楽しくなれることを思いつかなかったのか？そう、皆でワイワイと絵を描いてもポンと傑作が出来てしまうものなのだ(った)。例えば、地球上の絵の原初と言われる、ラスコーの洞窟絵などはどうだったのだろうか？独りの原人が苦行のように黙々と描いていたのか？それとも家族や仲間でもするかのようにワイワイと描いていたのか？とても興味がある。僕は今、他者と対話をし、その息づかいを確認しあいながら一緒に絵を描きあうということに1つの可能性を感じている。

### おだじま ひとし

1972年東京生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。1990年に「ザ・チョイス」入選。95年よりCD、広告物、書籍装丁のアートディレクションを多数手がける。同時に漫画家、イラストレーターとして活動。近年では展示活動も精力的に行う。2010年には自身のアーカイブの作品集『ANONYMOUS POP』を上梓した。<http://odajimahitoshi.com/>

## 英語教育と題材

高橋 貞雄

(玉川大学)

## 1. 何のための英語教育か

私たちは何のために英語教育をしているのでしょうか。社会の人たちは英語教育に何を期待しているのでしょうか。そして英語教育を受けている子供たちはどう思っているのでしょうか。本稿は、このような素朴な問いから始めてみたいと思います。

英語教育は、文字どおり英語と教育であり、英語の教育であると解釈することができます。つまり、英語を教えることがその第一義的な使命であると考えられます。そのために、英語の文法や単語や発音の仕方などを教える必要があります。また、英語はことばですから、社会生活を営む上でのコミュニケーションの仕方を教えることもします。新学習指導要領の総則の中で、「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と活用」ということが言われています。英語教育で言えば、英語の文法や単語や発音の仕方を習得させることが英語教育の基礎でしょう。

一方で、社会は日本人が英語を使えないということの問題にします。学校で英語を教えても英語が使えるようにならないではないか、と。そのために「英語が使える日本人の育成」といったことが日本の英語教育の課題として取り上げられます。このままでは中国や韓国に負けて、国際社会で生き抜いていけない、と脅しとも悲鳴とも言えるような圧力が英語教育に押し寄せているわけです。つまり、「活用」する力をもっとつけなければならないということです。

子供たちの視点から見るとどうでしょうか。最近、教職を目指す大学生を指導していて、学生たちが研究したいと思っている事柄にある種の傾向が見られます。それは、「やる気」とか「動機づけ」といったテーマです。中学生も大学生も、これからの社会

では英語が必要であることはわかっていますし、自分でも英語が使えるようになりたいと思っています。しかし、そこに持っていくためのドライブというか、エネルギーが足りないのです。英語の勉強は大変だし、授業はつまらないし、文法は難しい、といったトラウマが中学生や大学生の脳裏にこびりついているのです。それでも英語の勉強をして力をつけることができるのは一握りです。では、どうしたら子供たちを英語の授業に目を向けさせることができるでしょうか。英語を学ぶことや英語の授業が必要だと思ってもらえるでしょうか。

私はときどき学生に次のような質問をします。中学生のときの英語の授業で何を覚えていますか、と。多くの学生は何も答えられません。でも、ときどき、健のスピーチやムカミ（以前のNEW CROWNに登場するケニア出身の女の子）のことを口にする学生がいます。これは、中学生のときに自分の心を動かすものがあつた証拠です。逆に、何も思い出せない学生たちを目にしたとき、題材を吟味して教科書の編集に携わってきたものとしては、もの悲しさを通りこして淋しささえ覚えます。

英語教育は英語を教えることが使命であることは確かですが、英語で何を教えるのかといった視点はずっと大事であるし、もっと考えるべきだと思っています。英語教育は「教育」ですから、英語教育を通して子供たちを教育する（育てる）責任があるのです。学習指導要領のことばを借りて言えば、「生きる力」をつけなければなりません。英語で買物ができることも生きる力にはなるでしょうが、英語の授業で感じたり、気づいたり、考えさせられたり、心をゆさぶられたりする体験をさせてあげなければ、本物の教育ではないような気がしています。そ

れを可能にするのは「題材」だと思えます。

## 2. 学習指導要領再考

学習指導要領では、言語活動や言語材料について詳しい指針が述べられています。一方で、あまり話題になることはないのですが、題材についてもかなり詳しく述べられています。学習指導要領の指導計画の作成と内容の取扱いの教材の項目では、次のように記述しています。「…英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化を持たせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。

ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公平な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。]これらは英語教育における「教育」の面に焦点を当てて書かれているものです。英語の授業では、英語の文法や単語を覚えたり、ゲームなどの楽しい活動をする 것도大事ですが、上のような教育内容に責任を果たすとなると、やはり題材を吟味し、よりよい素材を子供たちに届けなければなりません。

## 3. なぜ題材を重視するのか

*NEW CROWN* がもっとも重視してきたことは、「人間教育」に資するということです。公教育においては、基本的にすべての生徒が英語教育を受けます。その英語教育によって、英語のコミュニケーション能力を身につけることはもちろん大切なことです。しかし、何を誰に伝えるのでしょうか。学習指導要領において、言語の使用場面の例として「買物」があります。英語教育の使用場面として、誰が何をかう場面を設定すればよいのでしょうか。子供になじみがあるという理由で、ハンバーガーを買うということではよいのでしょうか。一見些細なことのように

思えるかもしれませんが、「教育」であるならば、そこまで追求すべきであると思えます。題材とは、そのくらい重要だと思えます。

さて、*NEW CROWN* はこれまでにさまざまな題材を取り上げてきました。時代を見て、取捨選択してきましたが、ずっと継続している題材もあります。代表的なものは、キング牧師と広島とアリスです。なぜこのような題材にこだわるのでしょうか。そこに、教育者として子供たちに伝えたい、考えさせたいエッセンスがあるからです。キング牧師は、アメリカの歴史を知り、人権や人種差別について考えさせるのにもっともふさわしい題材です。それに、ことばの働きである「スピーチ」という点で、これほど人々の心を揺さぶる素材はあまりありません。広島を取り上げる理由は、もちろん平和です。人間は誰でも平和な社会を求めています。いまだに戦争が絶えません。戦争をやめられない人間とはいったい何なのでしょう。広島の原子爆弾を素材にして、平和の大切さをずっと子供たちに語り続けていきたいと思えます。アリスは、今学んでいる英語やイギリス文化と関係があります。アリスの作品をとおして、英語のリズムや、ことばの掛け合い(やりとり)、そしてことば遊びの伝統を、日本語や日本文化とは異なる形で体験できるのです。

*NEW CROWN* が大切にしてきたものの1つに「スピーチ」のレッスンがあります。ここでも、さまざまな題材を取り上げてきました。ざっと振り返っただけでも、船長になりたい、農業をやりたい、保育士になりたい、樹木医になりたい、などがあります。そして24年度版では、花火師になりたい、をテーマにしました。子供たちの視点では、これらの職業は必ずしもメジャーなものではないかもしれませんが。私たちが問題にするのは、キャリア観の育成です。自己の実現可能性としてのキャリア、キャリアの社会性、キャリアと環境や伝統、といった観点を登場人物の久美や健とともに考えてほしいのです。もちろん、スピーチのレッスンはスピーチの基本的な構造を反映させていますから、それを基にして、学んでいる子供たち一人ひとりが自分の夢を自分のことばで語ってほしいと思っています。

*NEW CROWN* の題材観は、*NEW CROWN* の

教育観と連動しています。私たちは、英語教育をとおして、「人間教育」「異文化理解教育」「ことばの教育」のそれぞれに責任を果たしたいと考えてきました。人間教育とは、まさに社会（国際社会）に貢献できる人間の育成です。このことは何も英語教育だけが負うべき責任ではありませんが、英語教育も責任を負っています。先ほど述べたキング牧師を代表とする人権問題、広島を素材にした平和教育、ことばと民族、環境保全の問題などは、共生の心を育てたり、思考力や判断力を育成したり、倫理観を涵養したりするうえで欠かせないことです。新学習指導要領であらたに加わった、伝統文化と自然科学も人間教育に資する領域です。当然のことながら、新しいNEW CROWNでは各学年で伝統文化と自然科学を取り入れています。いくつか紹介しておく、伝統文化としては、1年生の“Four Seasons in Japan”，2年生の“Enjoy Sushi”，3年生の“Rakugo Goes Overseas”が代表的な題材です。自然科学としては、1年生の“Field Trip”，2年生の“For Our Future”，3年生の“Learning from Nature”などがあげられます。

異文化理解教育は、とりわけ英語教育が責任を果たすべき領域です。NEW CROWNはこれまでも、そして今回も、さまざまな文化教育に資する題材を扱っています。世界にはさまざまな文化や伝統や価値観があること、そうしたことを学び理解しながら、それぞれがお互いを尊重し合う共生心を育むことが重要です。異文化理解教育の目的は、子供たちの世界観を広げることだと言えます。異文化理解の題材として、英米だけでなくアフリカやアジアを初めて扱ったのはNEW CROWNです。こうした教育観や精神は新版でも継承されています。新しく入った異文化の題材としては、1年生の“My Family in the UK”，2年生の“Aloha”，“Uluru”，3年生の“Finland— Living with Nature”，“Houses and Lives”などがあります。Finlandのレッスンは、フィンランドの自然とそれと共生する人々の暮らしをテーマにしたものですが、自然との共生という点では日本の生活に通じるものがあります。教材としては扱っていませんが、フィンランドはPISA型の教育という点で、子供たちの学力が非常に高い

ことでもよく知られています。どこかの時点で、なぜだろうかと考えてみるのもよいかもしれません。

英語教育において、もう1つ欠かすことのできない観点が「ことばの教育」です。英語教育は英語を教える教育ですが、英語を通してことばに対する感性を育てたり、ことばについて考えさせたりする教育でもあります。ことばは、ものごとについて考えたり、考えを伝えたりするうえで根幹となるものです。人間はことばをとおして社会や周りの人と関わります。ことばには、母語や第2言語や外国語などのいくつかの層があります。そうした、ことばと社会の関係や、一人ひとりのアイデンティティを確認するのもことばの教育です。NEW CROWNはケニアやインドなどのことばを考える機会を提供してきました。そうした地域の言語事情を学ぶことで、自分たちの言語社会がよくわかるわけです。

そもそも日本人が身につけるべき英語はどのようなものであるかについて考えることも大切なことです。私たちは、日本人が身につけるべき英語は、母語話者の英語ではなく、国際語（国際通用語）としての英語である、と考えています。それが国際社会においては妥当であるし、実際にそうならざるをえません。NEW CROWNには登場人物として、英語の母語話者、第2言語話者、外国語話者が登場します。彼らの言語使用状況が、まさに現在の国際社会で英語が使われている実態なのです。また、ことばは「力」を持っています。ことばによって、人は勇気をもったり、楽しんだり、傷ついたりします。そうしたことばの力を題材にしたのが、3年生の“My Favorite Words”です。さらに、3年生の最後の“English for Me”というレッスンでは、登場人物が3年間学んできた英語について振り返り、それぞれの考え方を寄せ書きにしています。もちろん生徒一人ひとりも自分の学習を振り返り、自分が学んだこと、将来の抱負を語ってほしいと思います。これもことばの教育の新題材です。

#### 4. 「読むこと」の意味

ここまで、英語教育における題材の扱いについて述べてきました。あるテーマや題材にアプローチするもっとも一般的な方法は、読むことを通して行わ

れます。今までの教科書にはいわば「本文」というものがあり、そこで文法や単語や題材が総合的に指導されていました。今回の改訂では、もう少し読むことに焦点を当てるべきではないか、と考えてUSE Readというセクションを設けました。ここで理解する力、読み取る力をしっかりと鍛えたいと思っています。文章には、メール、新聞、スピーチ原稿、物語など、さまざまなジャンル(テキスト・タイプ)がありますし、パラグラフなどの英文の構造もあります。英語力をつける上で大事なことはよい英文にできるだけ多く接することです。場合によっては暗唱してみることも大切です。こうした体験は英語のインプットとなり、やがては書いたり話したりする原資となります。もちろん、学んで知識を得たり、考えたり、感じたりする素材でもあります。

## 5. 新しい指導法の台頭

ここで、新しい指導法の流れを2つ紹介しておきたいと思います。結論から言うと、すでにその多くが、またはその一部が、中学校の英語教育の中で実現されていることでもありますが、今後の傾向として注目していったほうがいいと思います。

その1つは、内容中心の指導法(Content-based Teaching)です。この指導法は1970年代に登場したコミュニカティブ言語教授法(Communicative Language Teaching)の派生形または発展形の1つとして認められるようになったものです。初期のコミュニカティブ言語教授法は、「言語機能」に焦点を当てすぎるあまり、「phrase-book language」の指導であると批判されることもありました。そこで、コミュニケーション能力の育成を柱としつつも、言語は「内容」(contents)を土台にして教えるのが効果的であると考えられるようになってきました。内容中心の指導法で最も強い形態は、学校の教科科目を目標とする言語を使って教えるイマージョン教育や特定の目的のための英語教育(ESP)などです。日本の中等学校における英語教育の多くは、このような指導形態をとりませんが、各単元を題材シラバスで編成している教科書では、内容中心の指導法の弱い形として実践されていると考えられます。

もう1つ、近年注目され始めているのが、内容言

語統合型学習(CLIL: Content and Language Integrated Learning)です。この学習法はヨーロッパではすでによく知られている学習原理ですが、日本ではまだ紹介し始められた段階にあると考えられます。原理としては、内容中心の指導法と類似している点が多いのですが、ポイントは「内容」と「言語」を統合することです。CLILの関連で、フォーカス・オン・フォームという考え方が言われていますが、ただ目標とする文法を教えるということではなく、ある内容を持った英文に取り組む中で文法や表現に意識を向けさせたり、気づきを促したりする手法です。このような最近注目されている指導法に共通して言えることは、コンテンツ(題材)がしっかりといて初めて成立する指導法だということです。

## 6. 題材重視の授業を成功に導く原理

英語教育では題材が重要であるということを論じてきました。ここで留意してほしいことが1つあります。それは、題材は英語教育、すなわち英語の授業の中で取り扱われるべきだということです。たとえば、キング牧師の公民権運動やインドの社会生活は、道徳や社会科の中で教えることもできます。英語教育として扱うためには、スピーチや日常の言語生活に焦点を当てる必要があります。あるいは、人物伝としての英文を読み取る、といった観点が重要です。題材を重視した授業を成功させるためには、題材をつけたしや補足にするのではなく、題材の扱いそのものを授業の一部として組み込むことです。

## 7. 未来を担う子供たちのために

日本も世界も人間の生き方について、将来の生活について、自信を無くしているように思えます。しかし、未来を担っていくのはまぎれもなく、今、そしてこれから勉強していく若い人たちです。平成24年度版NEW CROWNの編集理念の冒頭は、「英語教育をとおして、確かな学力、豊かな心と、地球市民(世界市民)としての資質を備えた人間を育成する。」です。私たちが用意した教材をとおして、生徒たちがどのように考え、どのように成長していくのか、見守っていきたいと思います。

# 推論発問で メッセージを読み取らせる

田中 武夫

(山梨大学)

## 1. リーディング指導で主題をどう扱うか？

教科書の本文には、生徒に対する様々なメッセージが込められおり、それは主題と呼ばれます。例えば、環境や平和問題、偉人の生き方、伝統の大切さ、文化の違い、ことばの大切さなどです。本文に書かれたメッセージを読み取ることは、リーディング指導の重要な目標の1つです。しかし、私たち教師はそのようなメッセージをどのように扱ってよいか困ることがあります。例えば、生徒が題材や内容に興味をもってくれない、時間が十分になく教師が一方的に教えてしまうことが多い、などです。

では、題材に興味をもたせ、本文に込められたメッセージを自分の力で読み取らせるには、どうすればよいのでしょうか。本稿では、推論発問を活用した教科書本文の主題を読み取る指導のあり方について考えてみます。

## 2. 推論発問とはどのようなものか？

推論発問 (inferential questions) とは、「テキストの情報をもとに、テキスト上には直接示されていない内容を推測させるもの」を指します。テキスト上に直接示された内容を読み取らせる事実発問 (fact-finding questions) とは異なり、推論発問には次のような利点があります。

- ・テキストの細部と全体を必然的に読み取らせる
- ・同じテキストを何度も繰り返し読ませる
- ・生徒の背景知識を活性化し具体的な理解を促す
- ・他の生徒と異なる解釈や考えを共有することで別の角度からのテキスト解釈を促す
- ・テキストの主題を生徒自身の力で気づかせる

## 3. 推論発問で何を問えばよいのか？

テキストには必ず主題があります。しかし、主題は、テキスト上に直接述べられていないことがよくあります。そのため、テキストに書かれている情報をもとに、テキストに込められた主題を読み取ることになります。そこで役立つのが推論発問です。推論発問で次のような事柄を生徒に考えさせるのです。例えば、テキストには書かれていない場面や状況、登場人物の行動や意図、人物の性格や心情・関係、行動や出来事の結果、テキストにはない動作やセリフなどです。これらを推測させることで、具体的に、かつ深くテキストの主題を理解するきっかけをつくり出せます。それでは、具体的に見てみましょう。

## 4. 推論発問の具体例

右上のテキストは、オーストラリアで英語落語の海外公演をしているきみ江さんが、中学生のショーからインタビューを受けたときの新聞記事の一部です。このテキストを使ってどのような発問が考えられるでしょうか。

まず、正確なテキスト理解にとって欠かせない発問には、「きみ江さんはどこに住んでいましたか？ [アメリカ]」、「多くの人は何をたずねてきましたか？ [日本のジョークを言ってくれ]」、「アメリカ人は日本人をどう思っていましたか？ [決して笑わない]」、「ショーは何を一度も聞いたことがないのですか？ [日本人のジョーク]」、「ショーは何に感心したのでしょうか？ [きみ江さんが日本の笑いの文化を英語で世界に伝えようとしていること]」などが考えられます。これらは、テキスト上に書か



S: ... Why did you begin to perform *rakugo* in English?  
 K: When I lived in the United States, many people asked me, "Can you tell me a Japanese joke?" They thought Japanese never laughed.  
 S: That's true. I have never heard a Japanese joke.  
 K: I wanted to share our special tradition of laughter. So I perform in English.  
 S: I'm impressed. How long have you been on this tour?  
 K: For four weeks. I've been to India, Malaysia, Singapore ... and now Australia. The tour has been very exciting.

れた情報を使って答える事実発問です。

しかし、これだけではテキスト主題を深く理解できない可能性があります。そこで、次のような推論発問をたずねてみるすることができます。

テキストには、日本人は決して笑わないとアメリカ人に言われたときの、きみ江さんの気持ちまでは書かれていません。そこで、「きみ江さんはそのときどう思ったかな?」、「どんな気持ち?うれしい?怒った?くやしい?」、「なぜ?」のようにたずねることができます。生徒からは、「悲しい[日本人が正しく理解されていないから]」、「怒ったと思う[日本人をバカにしないで]」、「くやしい[日本のよさが伝わっていない]」などの答えが出てくるはずです。

また、きみ江さんの落語が伝わったかどうかは、直接述べられていません。そこで、「きみ江さんの落語は世界の人々にうまく伝わったと思う?」とたずねてみます。本文中の "I've been to India, Malaysia, Singapore ... and now Australia. The tour has been exciting." の部分から、日本の笑いの文化が世界各国で受け入れられていることが推測できます。

もう1つ。海外での落語を通し、きみ江さんが何を学んだかは直接書かれていません。そこで、「世界各国で落語を伝えてきて何を学んだと思う?」と

問うことができます。予想される生徒の答えとしては、「日本の笑いは世界にも通じる!」、「日本のよさを世界に伝えるためには、英語は欠かせない!」などが出てくるでしょう。生徒のこれらの答えこそがこの本文の主題です。この発問をきっかけにして、自分たちで主題に気づくことができれば、生徒は達成感やテキストの価値を感じるはずです。

## 5. すぐれた推論発問をつくるポイントとは?

では、どのようにすれば、すぐれた推論発問をつくれるのでしょうか?ポイントは2つです。1つめは「主題に関わる問いをつくること」、2つめは「テキスト内にヒントが必ずあること」です。

まず、教師自身がテキスト主題は何であるかを考えてみることです。先ほどのテキストでは、きみ江さんのエピソードを通し、「日本のよさを世界に伝えていく必要がある」、「英語を通して日本のことを理解してもらうことができる」など、文章に込められた読者へのメッセージを教師自身が読み取り、それにつなげる推論発問を考えてみるのが大切です。

推論発問の2つめのコツは、テキスト内にヒントが必ずあることです。ヒントのない推論発問では、生徒のテキスト理解が深まることはありません。「なぜそのように考えたの?」のようにたずね、テキストのどこにヒントが書かれているかを確認し、異なる根拠や解釈をクラス内で共有することで、クラス全員のテキスト理解が自然と深まるでしょう。

このように、最終的にどのようなテキスト主題を理解してほしいかをしっかりと考え、そこから逆算し、テキストに書かれた情報をヒントにしながらかぎとすることができます。推論発問をつくり出すことがカギとなります。テキストの主題を深く理解させることがリーディング指導の目標の1つであるとならば、推論発問は、その指導目標を達成させるために欠かせないステップの1つとなります。テキスト理解を深める仕掛けとして、ぜひ明日の授業から推論発問を活用してみたいかがでしょうか。

### 【参考文献】

田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸(2011),『推論発問を取り入れた英語リーディング指導:深い読みを促す英語授業』三省堂

# グループワークで題材の理解を深めよう

## — TBLT理論のすすめ

山本 崇雄

(東京都立両国高等学校附属中学校)

### 1. TBLT とは

TBLT (Task Based Language Teaching) は CLT (Communicative Language Teaching) の理念に基づいた教授法の1つであるが、最大の特徴は、学習者に達成させるべきタスク(課題)を与え、その課題達成のための道具として英語を使わせる点にある。

Rod Ellis 氏によれば、タスクとは次のように定義される。

1. A task involves a primary focus on meaning.
2. A task has some kind of 'gap'.
3. The participants choose the linguistic resources needed to complete the task.
4. A task has a clearly defined outcome.

この中で、focus on meaning (言語材料にとられず、意図する事柄を伝えること) に主な焦点が置かれている点が最大の特徴である。例えば、「(教科書の) 絵を使って、内容を英語で話す」というタスクでは、必ずしもそのレッスンで使われる文法項目を使わなくてもよいのである。

### 2. form (言語材料) の指導

しかしながら、文法シラバスがしっかりしている日本の英語教科書では form (言語材料) は無視できない。form がわからないために、タスクが達成できないことも考えられる。その場合、タスクを達成させるために必要な文法項目を予め導入するとよい。例えば“want to ~”が新出文型であれば、教科書の導入の前に、「1週間の旅行の計画をたてよう」というタスクを行う。その際、必要な表現とし

て“want to ~”を導入すれば、自然に from にも注目させることができる。

### 3 GET の題材を TBLT で深める

ここでは、24NC Book 2 Lesson 5 GET Part1 を例に、TBLT を意識したグループワークの指導を紹介する。

[タスク：p.54の絵を使って内容を英語で説明する]  
(活動形態：6~7名のグループワーク)




上の絵をグループに1つずつ渡し、内容についての Guess Work を行う。グループワークをさせるにあたって、アクティブな活動ができるように、必ず最初にルールを確認する。グループワークで私が大切にしていることは、① No Japanese, ② Everyone talks の2点である。これが守られないときは、すぐにグループから個人活動に切り替えるなど、最初の段階でのしつけが重要だ。さらに次のようなステップを踏んでグループワークを行う。

**Step 1 Ice Breaking** 登場人物について今までに知っていることを話そう。

**Step 2 Buzz Discussion** 絵から自由に話を想像しよう。

**Step 3 Talk and Ask** 内容に関する自分のこ



## For Active Group Work

1-class(    )no.(    )name(    )

◎Be Active! --- No Japanese. / Everyone talks.

**Step 1** Ice Breaking 登場人物について今までに知っていることを話そう。

Who is this boy/girl/man/woman ...? / What sport does he/she like? // What does he/she do? / Where is he/she from?  
 ---He/She ...His/Her name is ...    ---He/She likes ...    ---He/She is a teacher.    ---He/She is from ...

/ Where does he/she live? / How many CDs does he have? / When ...? / Whose ...? / Which ...? / Why ...?  
 ---He/She lives ...    ---He has ...

**Step 2** Buzz Discussion 絵から自由に話を想像しよう。

I think Ken/Kumi/he/she...    I guess Ken/Kumi/he/she...

発言を促す What do you think, Mr. /Ms. ...?

{
   
○同意 I think so, too. / I agree with you/Mr. .../Ms. ...
   
×不同意 I don't think so. / I don't agree with you/Mr. .../Ms. ...
   
---I think/guess ...
 }

**Step 3** Talking about yourself and asking questions 内容に関する自分のことを言おう。質問をしよう。

I like / have / play / study / think ...    I'm ...    (I think) it's interesting/boring/exciting/scary/easy/difficult/important ...  
 Do you like / have / play / study / think ...?    Are you ...?    (Do you think) it's interesting/boring/exciting/scary/easy/difficult/important ...?



**Step 4** Oral Presentation 教室に貼られたヒントを読んで、班員に正確に伝えよう。最後に一人ずつ絵の内容を英語で表現します。

班で一人がヒントを読む

 → 
 

班員に伝える

 → 
 

班員はその英語を何度も言う

 → 
 

別の人がヒントを読む

 → 
 

繰り返し

 ...

と言おう。質問をしよう。

Step 1~3 までは、絵の内容について、自由に話すことができる。知っていることから、自然に話させるステップが重要である。最初の敷居を低くすることが、スムーズに話し始めることにつながる。

**Step 4 Oral Presentation** 教室に貼られた英語を読んで正しいストーリーを理解しよう。

Step 4 では、実際の内容の読み取りに入る。教科書ではダイアログで書かれているので、これをモノログに書き換え、教室の壁に貼る。各グループから1人ずつ、壁に貼られた情報を読み、グループで内容をシェアする。Read & Talk といったイメージだ。

〈壁に貼付ける情報の例〉

[Lesson 5 part 1]

Ken and Emma are talking about the day-at-work program. It's "shokugyo-taiken" in Japanese. The day-at-work program is coming next week. Emma wants to go to a farm. Ken wants to work in a department store. They will have a great time.

壁に貼ってある情報を何度も読みながらグループで共有していき、何度も練習することによって、グループのメンバーが自力で Reproduction ができることを目指す。

教科書の内容を絵を使って英語で話すことが、題材を理解することにつながる。さらに、内容について自分の考えや感想を話したり、聞き手に質問したりすることで題材の理解は深まる。GET は比較的平易な英語で書かれているので、アウトプットを充実させることにより、題材の理解が深まり READ の内容と量のある英文につなげることができる。

**4. グループワークでアクティブに**

グループワークでは、ある意見に対して、全員が I think so, too. / I don't think so, I think ...What do you think? といった反応を意識し、誰でも公平に発言できる雰囲気を作りたい。Reading Task のように一問一答になる場合でも、Why? を考え、論拠を探すところまで考えさせると学びが深くなる。継続的に指導していけば、中学英語でも TBLT に基づいたアクティブなグループワークで、学び合いながら題材を深めていくことができる。

## 題材を掘り下げる指導

西村秀之

(横浜市立富士見中学校)

## 1. 教科書は宝箱

教科書の新しい単元に入る前に、年間計画は立ててあるが、改めてその単元を見てみる。教科書を扱う際には、その単元の新出文法事項とともに、題材にも大いに注目する。教科書には、本当にさまざまな分野にわたる興味深い題材が散りばめられている。日本や他国の文化、環境問題や平和問題など、スペースも限られている中、独力でこれだけの題材を扱い、かつ中学生に理解され伝わる英文を作ることにはなかなか出来ることではない。教科書は宝箱だと思う。かく言う私自身は、教員になり教え始めた頃は、題材を読み深めるなどと考えたことはほぼなく、その面白さに気付くことも少なく、教科書以外の言語活動に目を向けていた一人であった。

しかし、そんな私に題材の面白さや深さを気付かせてくれたのは、当時使っていた *NEW CROWN* だった。Book2の Pete Gray (“A Major Leaguer with One Arm”) の話であった。Reading 教材として載っていたものであるが、内容理解をした後に、生徒たちにグループでの音読発表を課した。生徒たちは教科書に載っている情報以外にも、その人物がどのような人物であったか、どのような人生を送ったのかなど、表現しようとすればするほどさらに知りたくなり、こちらが持っている情報以上のことを質問してきたのであった。生徒たちの音読発表は、Pete Gray の生き様をより事実に沿って表現しようとした大変素晴らしいものであった。それは、題材を深めていくことの大切さを、生徒たちの生き生きした英語で表現する姿から意識させられた時間であった。

## 2. 題材に込められたメッセージを読む

その題材に込められたメッセージは何か、生徒たちにその題材を通してどのようなことを感じ、考えてもらいたいのか、単元に入る前にいろいろ思いを巡らせる。ただ教科書の英文を確認するだけではもったいない。教科書の文章を通じ、どのように生徒たちの気持ちに響かせていくか。まずはその題材について、TM やインターネット等を通じて、自分自身の知識を深める。新たな発見をすることも少なくない。そして、生徒たちに題材をどうつなげ、その題材について生徒たちに最終的に何を求めていくか(何を考えさせたいか、何を感じて欲しいか、意見文を書かせる、クラスで意見を交換する、など)を決定する。そして、その目標に向けて教科書の本文をどのように扱い、また、プラスのインプットには何が必要か、それをどう展開していくかなど、具体的に授業計画を練っていく。ワクワクする楽しいひと時である。

## 3. 内容理解を自分につなげる

私はとくに、*NEW CROWN* Book3 の後半 “I Have a Dream.” そして “A Vulture and a Child” と続くところを好んでいた。題材としては深刻で、かつしっかりととらえていかなければならないところなので、より気が引き締まる思いである。しかし、どちらの題材も、3年生後半に考えさせたり、感じさせたりするのにふさわしく、また、ぜひ持っていてほしい視点であった。キング牧師のレッスンでアメリカの黒人社会の歴史などに触れた後に、ハゲワシと少女のレッスンで世界に目を向けてみる。

生徒たちにまず“A Vulture and a Child”の写真を見せると、「かわいそう」「何で助けられないの？」などの声が上がります。レッスンの始まりである。そこで、Sudanの現状などを教科書の英文をもとに“problems”に注目させながら、またプラスの情報も読み物教材として提示しながら、現状を把握していく。

「へえ、そうなんだ」「知らなかった」の声があがる。

ほとんどの生徒たちは、まずSudanという国の存在すら知らない。Sudanという国がどのような国なのかということを理解し、認識することなくして、この写真について考えることはできない。

Sudanについて知った上で、改めてpicture cardを見せる。そして、この写真の撮られた状況、写真が発表された後のこと、Kevin Carterを取り巻く状況を、教科書から読み取る。さらにKevin Carterについて、その後の人生（後に彼は自殺をしてしまう、など）について話して聞かせ、そして読ませる。初めて写真を見た時には、「かわいそう」「何で助けられないの?」と言っていた生徒たちも考えこんでいる。

さまざまな背景を知った後に、改めて写真について尋ねてみる。すると、「写真でSudanの現状を知らせたかったのだから撮ってよかった」など、これまでとは異なる意見も出始める。その一方で、「一人の命は大切。撮るよりも助けるべき」といった反論も出てくる。「写真を撮ってすぐに助けてあげればいいよ」など、背景を踏まえ、一人ひとりがその立場にたって考えるところから、さまざまな意見が出てくる。いろいろな意見を聞いた後に、自分の意見をまとめる。そして、次のセクションの読み深めへとつなげていく。

“Even a simple action, like taking photo, can have two sides.”この文章の意味をとらえる。そして、生徒たちに投げかける。

「事実を知り、いろいろな見方があるんだ、ふ〜んというだけで、よいのだろうか。」

このLessonで掘り下げてきたKevin Carterの写真をめぐる話に思いを巡らしているのだろうか、生徒たちはしばらく考え込む。

「募金する」「何を送ればうれしいかな」など、意見

が出てくる。こちらがたどり着かせなかったゴールの1つであった。Kevin Carterの写真の是非について正解はない。報道することの難しさ、報道の意義を理解させると同時に、物事にはいろいろな見方や考え方があることを生徒たちに知ってもらう。その上で、自分だったらどうするか、自分だったら何ができるかなど、最終的に題材を自分自身のことに結び付けて考えさせたかった。その後、生徒たちには、Kevin Carterの行動についての自分の意見やSudanの現実を踏まえ、自分にできることは何か、自分だったらどうするか、というテーマで教科書を読み返させながら、writingによってこのLessonを締めくくった。

#### 4. ねらいをもった発問で深める

題材を掘り下げる視点は常に持っていたい。しかし、掘り下げることで授業の年間計画に支障が出てしまっては困る。掘り下げるといって、大きなプロジェクトを考えたり、時間がかかるのでは、と考えがちだが、それはちょっとしたサジ加減でできるのではないかと思う。“A Vulture and a Child”では、教科書の本文、キーワードをもとに、さらに情報を付け加えたいところでは+αの読み物を準備したが、それ以外は、題材の何を考えさせたいか、どのようなメッセージを感じ取ってほしいか、という意図に合わせた教師の発問によって、題材を深めていった。授業時間からみても、まったく負担にならずに進めることができた。

まずは、単元に入る前に教科書を読み、自分自身がその題材に興味をもつこと、私はそこから始めている。英語という1つの言語の習得を目指して生徒たちの可能性を広げるとともに、題材の内容を、少しの工夫で深め、生徒の心を揺さぶることで、生徒たちの人間的な深さや幅を深め広げていけたら、という思いを込めて授業を組み立てていきたい。

生徒たちはメッセージをどう受け止め、どう考えてくれるだろうか、ワクワクしながら今日も教室に向かおう。

\*授業でのやり取りは英語で行われている部分もありますが、本稿では日本語で表記しました。

# 英語学習の *Doing, Feeling, Thinking* (3)

竹内 理 Takeuchi Osamu  
(関西大学)

これまで本連載では、自己調整学習 (Self-regulated Learning: SRL) の枠組みの中で、(1) 学習行動や学習方略と関係する *Doing* の領域、および、(2) 学習者の情意に関わる *Feeling* の領域について、学習場面と関係づけながら議論してきた。最終回となる本稿では、目標設定や学習計画、さらには振り返り・修正に関わる *Thinking* (つまりメタ認知) の分野について議論してみたい。

## 1 目標を持つ

英語学習成功者の研究を概観すると、共通して見られる特徴の1つとして、具体的な目標を持って学習を進めている、ということがあげられる。彼らの目標の多くは自ら設定したものであり、たとえそれが他者から与えられた場合でも、その意義を納得し、これを内化して取り組んでいる傾向が高い (Miura, 2011; 竹内, 2007; Takeuchi, 2009)。

成功者の目標設定は、時間軸で分けると大きく3つに分類できるようで、まず短期目標の場合は、身近で具体的なものが中心を占め、少しの努力で比較的容易に達成される傾向の目標が多い。一方、中期目標の場合は、短期目標の達成をいくつか積み上げていくことで実現していけるものが多く、達成感を味わえるような内容が中心となっている。これに加えて、学習成功者は長期目標も持ちあわせており、これらはビジョンという形で、成功の具体的かつ明確なイメージとして、彼らの中に存在しているようである。

では、我々が直面している中学校の教室場面では、生徒たちは英語学習に関する明確な目標を持っているのであろうか。また持っているとする、それらは自己決定的なものであろうか。残念ながら、多くの学習者は明確な目標を持ちあわせておらず、自己

決定的な目標を持つ学習者に至っては、ごく少数と言わざるを得ない。筆者は、ここに教師の果たすべき役割があると信じている。なるほど、個々の生徒に合った目標を設定するのは至難の業であろう。また中学校の段階の学習者に、長期的目標を持たせるのも不可能に近いかもしれない。しかし、目標がなければ学習は継続的に進まない。せめて子どもたちと一緒に、達成可能な当面の目標を設定していくこと、そして、生徒たちが「なんで英語なんか勉強しないとイケないの」と、正面を切って (ビジョンを) 問うてきた時、これに対して、彼らが納得するような答えを用意しておくことが、我々教師に求められているのであろう。

## 2 計画を立てる

目標が定まれば、次にその達成に向けた学習計画を立てることになる。この際に重要なのは、チャレンジという要素であろう。心理学者のミハイ・チクセントミハイ (Mihaly Csikszentmihalyi) は、能力と挑戦が拮抗した時、あるいは後者がやや上回った時に「フロー」(Flow) という没我状態が生じ、この状態こそが、いろいろな能力の伸長にとって重要となると主張している。すぐにできることばかりではなく、少し考え、工夫し、繰り返して習熟していくというチャレンジの要素を学習計画に取り入れなければ、能力の伸長はあまり望めないというわけだ。もちろん、生徒だけで適切な学習計画を立てるのは困難なので、ここにも教師によるモデル提示などの介入が必要となろう。

また、計画の立案・遂行には、外国語の学習過程全般に対するある程度の知識が必要となる。たとえば、単語の学習は集中学習がよいのか、それとも分散学習がよいのかといったことや、英語スピーキン

グ時にプロソディ(リズム, イントネーションなど)が単音以上に重要な役割を演じること, さらには学習の成果は, 投下した時間に正比例して現れるような単純なものではない, といったことなどを知っておれば, 計画立案や遂行の際に役立つ。このような知識のことを総称してメタ知識とよび, 学習プロセスに関する知識, 学習方法に関する知識, タスクに関する知識, 学習内容に関する背景知識, さらには学習に関する信念などがこの中に含まれている。

ただ, このようなメタ知識の所有を生徒に期待することは, 通常は無い物ねだりとも言えるため, 折に触れ教師の側から提供し, 計画の立案・遂行に利用させていく必要がある。また, 学習に関する誤ったビリーフを持つことは動機の維持, ひいては学習計画の遂行に悪影響を及ぼすため, まずは生徒の持つ英語学習に関するビリーフを書き出させ, 誤ったものに関しては実例や経験, 科学的データをあげながら修正していくような(信念崩しの活動)機会を持つことも, 教師の果たすべき重要な役割と言える。

### 3 振り返り, 修正する

ひとたび計画が立ち, それが実行され始めると, そのまま放置しておいても事が成就するかのような幻想にとらわれることがある。しかしこれは, あくまでも幻想にしかすぎず, 実際は途中の数か所で評価を行い, 問題点を修正していかなければならない。このような評価のことを「形成的評価」(Formative Evaluation)といい, これを生徒自らの手で行っていくことを「振り返り」(Reflection)とよぶ。

ひと口に振り返りといっても, 中学生にとっては決して容易な作業ではない。まずは何を振り返らせるのか, その観点をシンプルに提示しておかねば, 振り返りは不可能であろう。観点の設定に加え, それがどの程度達成されていれば再学習の必要がないのか, を判定するための判断基準も定めておく必要がある。さらには, 振り返りの結果に対して教師が毎回フィードバックを与えることで, その意義や出来栄などを常に意識させ続けることも大切となる。つまり, 振り返りを当たり前の行為にするためには, その全過程において, 教師の絶え間ない介入

が必要なのである。

振り返りの結果, 目標設定や計画, あるいは学習行動に問題ありとなると, 修正の作業に入るわけだが, どのように修正するのかは, 学習成功者でも試行錯誤の連続となる。したがって, ここでは教師の指導だけでなく, クラスの友達や先輩たちの経験も含んで修正を考えるような, 協働的な方法の導入が望まれる。

## 4 まとめ

本稿では, *Thinking* の領域について, 「目標の設定」, 「計画の立案と遂行」, 「振り返りと修正」の観点から議論した。この過程で示されたことは, *Thinking* の能力は自然と身につく類のものではなく(ましてや生得的に備わっているものでもなく), 教師をはじめとした他者の介入を受け, そのやり方を徐々に内在化しながら伸ばしていくもの, ということであろう。「自律的な学習者を育てるためにはメタ認知の能力が不可欠」とよく言われるが, この能力を身につけるためには, 長い指導の過程が不可避であり, これはとりも直さず, 教師の指導上の計画性も問われているということになる。

本連載では, 自己調整学習(SRL)という枠組みを基盤にして, 英語学習においては目標の設定が重要であること, そして *Doing, Feeling, Thinking* のすべてを取り扱わなければ全体像は見えてこないことなどを議論してきた。この議論は, 明日の授業にすぐに役立つというものではないが, 授業を計画していく方向性に迷った時などに, 必ずや判断の指針となるであろうと筆者は強く信じている。

#### 【参考文献】

- Miura, T. (2011). Motivational trajectories of successful foreign language learners: Six biographical case studies. Ph.D. Dissertation, Temple University.
- 竹内 理 (2007). 「達人の英語学習法—データが語る効果的な外国語学習法とは」東京: 草思社
- Takeuchi, O. (2009). Learning from good language learners in a specific context. In T. Yoshida, et al. (Eds.), *Researching language teaching and learning: An integration of practice and theory* (pp.305-322). Oxford: Peter Lang.



# 「わかること」から「使うこと」への変化とその評価

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

## 1. 言語習得のプロセスと評価

私たちの言語習得のプロセスは、実はかなり複雑である。今日学んだことがすぐにできるようになるわけでもないし、きちんと学んでいなくてもいつの間にかできてしまうこともある。

後者のようなケースはあり得ないと思われるかもしれないが、言語的に複雑な現象などはメタ的な説明がうまくいかなくても、「言語習得装置 (language acquisition device)」が働いて、しばらくすると(勝手に)できるようになることがある。なんだか理由はよくわからないけれども「絶対これが正しい」などと言えたりするのもこのおかげである。

一方、前者の場合、「教育評価」という観点から考えると深刻な問題を提起することになる。現在、学校教育での評価は、英語に限らず常に学んだ直後に行われているが、これはある種の知識しか見ていないことになるのではないだろうか。本稿では、こうした評価を繰り返すことで、言語習得の大事なものを見落としていないかについて考えてみたい。

## 2. できるようになるプロセス

以前にもこの連載で書いたが、言語習得の大まかなプロセスを確認しておく、日本で外国語として英語を学ぶ場合は、たいてい教室環境で学ぶことになる。とすると、<sup>えんえき</sup>演繹的にせよ帰納的にせよ教師がルールを説明し、生徒はまずそのルールを理解しなければならない。したがって、生徒にとっての第一関門は、その「ルールが理解できる」かどうかである。次に問題となるのが、このルールを適用できるか、つまり、「使える」かどうかである。「ルールが理解

できること」と「使えること」は必ずしも同義ではない。さらには、「使えること」と「使うこと」もまた別である。なぜなら、使えるからといって、実際に「使う」かどうかはわからないからである。ある程度、自分でも自信があり、余裕をもって使えるようでない、「使う」と自体を避けてしまうこともある。なお、この場合の「使う」というのは、特定の言語材料を使わなければならないという指定がない状況で、辞書などの参考資料を使わず自力で書いたり、特段の準備をせず即興で話したりする場合のことである。

もう一度整理すると、言語習得には「わかる段階」「使える段階」「使う段階」がある。この観点からこれまでの評価を振り返ると、それはもっぱら「わかる段階」への到達の有無に焦点が当てられていたと言える。もちろん、学習の最初の段階でルールを理解したかどうかという情報は大切である。しかし、それだけでは、全体像を見失っていることになるのではないだろうか。ルールを使えるようになっているかどうか、また使うようになっているかどうかということも、わかることと同じくらい、あるいは、それ以上に重要な情報である。

## 3. 習得になぜ時間がかかるか

ルールを理解してから、使えるようになったり、使うようになったりするまでには時間がかかるが、その原因はさまざまである。

まず、「操作が複雑なもの」はなかなか使えるようにはならないと考えられる。日本人にとっては、受動態などはこれに当たるかもしれない。be 動詞の正しい形を選択したり、動詞を過去分詞形に変えたりしなければならぬからだ。また、一般動詞の疑



問文も教師が思っている以上に初学者にはやっかいである。これらはどちらも、学習者がその文法項目を使うために、いくつものステップを踏む必要があるものである。

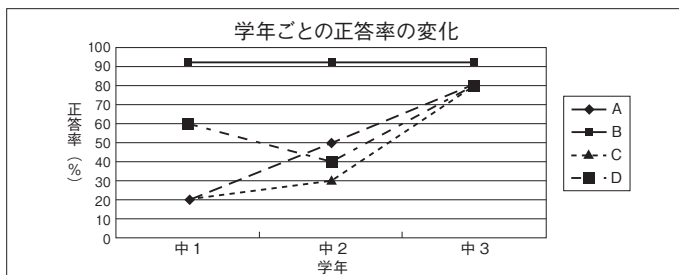
次に、いったん学んで以降、減多に出会わないものや、あまり使う必要がないものは、なかなか身につかない。例えば、比較級・最上級などは、学んでもそのあとに常に出てくるというわけでもない。

それから、冠詞のようにその概念自体がわかりづらく、イメージ化が難しいものも習得に時間がかかる。冠詞は、名詞につけるだけということで特に複雑な操作は必要なく、学習のほぼ最初の段階から毎日のように出てくる。それにもかかわらず、日本人がなかなか正しく使えるようにならないのは、その概念が意外と（日本人にとって）やっかいだからだろう。

また、ほかにも、指導方法が原因で習得に時間がかかってしまうのではないと思われるものもある。例えば、関係詞はよく2つの文を合体するというように教えられているが、このように教えられると、関係代名詞を含む文を言うためには、あらかじめ2つの文を考えておいた上で、これらの文をつなぐ作業をしなければならなくなる。しかし、まず1つの文を考え、次にその中の名詞を関係代名詞で別の文とつなげるのであれば、それほど負担はかからず使えるようになるかもしれない。それから、使う練習がまったくなされないもの、練習の量が足りないものなども、なかなか使えるようにならないだろう。

#### 4. わかるようになるプロセス

わかるようになるプロセスも、実はさまざまである。下のグラフは、ある英語力調査の中の文法・語彙問題の正答率の変化の概略を示したものである。



この調査では、中学1～3年生が参加し、その中のいくつかの問題は、3学年共通で出題されている。したがって、この共通問題の正答率を見ていくと、1年生で学んだ言語項目が、どのようなパターンでできるようになっていくかがわかる。

このデータを見るまでは、私自身は何となく「徐々に正答率が上がっていく」というようなイメージを持っていた（グラフ中のAのパターン）。しかし、項目の中には、最初からほとんどの生徒が正答しているが、正答率はそれ以上にはあまり上がらない項目もある（グラフ中のBのパターン）。

また、1年生、2年生では正答率が低い、3年生になると正答率が急に上昇する項目もある（グラフ中のCのパターン）。こうした項目は、おそらく本当の理解までにかなり時間がかかるということであろう。

さらに、学習した直後はある程度の正答率を示すが、2年生になるとそれが下がり、3年生でまた上昇を示すものもある（グラフ中のDのパターン）。この原因は明らかではないが、操作性の複雑なものは、学習した直後はそこそこできるが定着はしておらず、本当の意味でできるようになるには、かなりの時間を要するというかもしれない。

#### 5. 観点別・絶対評価への示唆

今日、日本で行われている観点別・絶対評価では、指導の直後にその成否を見ているが、その指導項目がその後どうなっていくかは評価対象となっていない。もちろん、文法などのテストング・ポイントが明確に絞られていない、「ライティング・テスト」や「リーディング・テスト」などでは、その中に既習項目が含まれることはある。しかし、これらはたまたま含まれているのであって、狙って見ているわけではない。長期的展望という視点に基づく評価結果は、今日の日本の評価システムではどこにも行き場がないが、生徒の英語力の発達を追い指導のあり方を考える上では、とても重要なものである。

## ICTと英語の授業(1) — フラッシュカードと 語順の理解

杉本 薫 Sugimoto Kaoru (東京都立両国高等学校附属中学校)

### 1. 「何ができるのか」と問うなかれ

例えば本稿のタイトルが「黒板を使った英語の授業」だったらどうだろうか。黒板が日本で使われるようになったのは明治時代らしいし、ちょうど英語などの外国語教育という考え方も導入されてきた頃なのだろうから、もしかすると「黒板」以前と「黒板」以後の指導法の変化という対比もできるかもしれない。僕が教師になった今から30数年前頃には、当然すべての教室に黒板はあった。他には教具はそれほど多くはなかった。さすがにこの頃には、「チョーク1本あれば」という教師はそういなかった。でも、少しはいたように記憶する。

どの教師も、当時ある程度普及していた教具を、「当たり前」に使っていた。数学の教師は大きな定規とコンパスを持って教室に行っていたし、社会の教師は掛け図の地図を運んでいた。英語の教師はといえば、カセットのテープレコーダーを持ち歩いていた。市販のピクチャーカードやフラッシュカードもたぶんあったのだろうが、今ほど普及はしていなかったように思う。この「当たり前を使う」ということの大切さは、次回に詳しく話す予定だ。

黒板を使えば、文字や言葉を自由な大きさに生徒に示すことができる。もちろん、消すことも簡単にできる。黒板がなかった頃と比べることができるならば、これは間違いなく画期的に便利な発明だ。黒板以後の教師たちは、小中学生に「口述筆記」や「筆写」だけでどうやって授業ができたのだろうと、黒板以前の状況をいぶかしげに語っていたにちがいない。

新しい教具や提示機器は、先人のひらめきや工夫で開発されてきたのだろう。おそらくは黒板もそういった歴史があると想像する。黒板が教育のために発明・開発されたのかどうか僕は知らない。しかし、

これが「当たり前の」教材提示設備としてすべての教室に普及したのは、単に発明や製品が優れていたからだけではないはずだ。

それは、「そういうことが簡単にできたら、きっとわかりやすくてより良い授業ができるのに」という問題意識を多くの教師が共有していたからにちがいない。これは、問題意識というよりも、授業改善をめざす志というべきものだ。つまり、発明や開発はあちこちで突然変異のように起こるが、それを使いこなして普及させるのは、それを使うものの意志と意欲に他ならない。だから、ICTに対する正しい質問は、「何ができるのか」ではなく、「何がしたいのか」でなければならない。ICT (Information and Communication Technology) といえばそれだけで現代社会を表現できそうな広い言葉だが、英語教育に限って言えば、それは「授業改善の次の一步」であるだろう。そしてその一步が、かなり効果的であるということ、これからの3回の連載で示していきたい。各回とも、ICTを活用する指導者の持つべき理念と、実際の実践例を織りまぜつつ語っていこうと思う。

### 2. 実践例紹介

#### (1) 本当にフラッシュできるカード

まず紹介するのは、フラッシュカード。教科書会社が準拠版で出しているデジタル教科書には必ず入っている機能だ。先の問題意識を「願い」と置き換えれば、これなど、まさにすべての英語教師が「できたらいいな」と願っていたはずの機能である。つまり、文字通りの flash を実現してくれるものだ。

フラッシュカードは、生徒に文字や単語と音声のなめらかな関連性を理解させる。口頭での練習から文字やつづりを意識した教科書の音読練習へと進める授業の展開で、その一歩手前に位置させるべきも

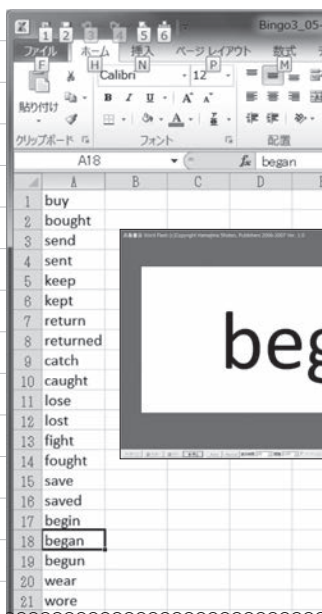
のである。非常に重要で、黒板以上に、当たり前の学習場面である。

さて、これを授業で使いこなすためには2つの大きなハードルがある。

- ①語彙の選び方：多くは新出語を並べるだけでもよいが、実際の授業では、復習の音読練習などの機会を考えると、かなり工夫しなければならない。
- ②フラッシュさせる技術の習得：単語カードではないので、見せて発音を教えるだけでは不十分である。あくまで、白いカードで隠しながら、チラッとフラッシュさせて、一瞬で音声を呼び出さなければ意味がない。これまでに何回練習しただろう、と多くの教師が口をそろえるはずだ。

そこで、ICTの出番である。②については、完璧にやっつける機能を持っている。教師はクリック1つで済む。ただし、教科書会社が提供しているデジタル教科書の中のフラッシュ機能では、ほとんどの場合、語彙を自由に追加したり削除したりというカスタマイズができない。新しいページに登場する新出語句は、当然のことながら100パーセントカバーしているが、「復習の範囲だけれど、うちの生徒にはどうしても必要なあの語彙」は一緒に扱うことができない。この点は、現場では非常に困るはずだ。だから新しい技術を横目で見ながら手書きやパソコンからの印刷でアナログなカードを作ることになる。生徒がこのアナログなカードでの活動を案外楽しみにしているようなケースもあるので、一概に否定はできない。しかし、「それも可」というための大前提条件は、②のフラッシュ技術を指導者が取得できていることである。

ここで紹介したいのは、浜島書店が無料で配布しているWord Flashというソフトである。エクセルなどの表計算ソフトで単語のリストを作っておけば、それを自動でフラッシュさせてくれる。フラッシュのスピードも0.5～3秒で、次の語との間隔も0～2秒の中から選ぶことができるし、手動で次の語に進めることもできる。同じファイル内の語を、ランダムに出すことも順番通りに出すことも可能だ。また、フォントや色、データに日本語を合わせて表示させることもできるなど、細かなカスタマイズもできる。

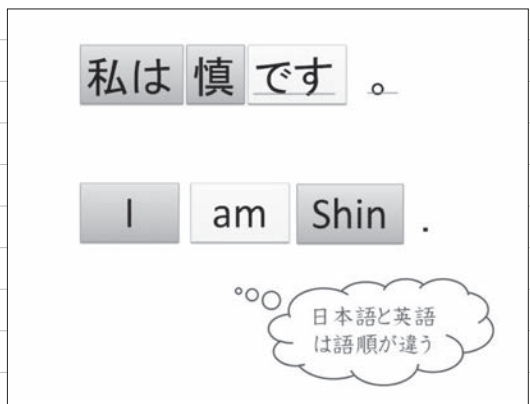


普通の授業で想定されるフラッシュカードの機能として必要なものは、すべてそろっている。東京都中学校英語教育研究会の研究部のホームページで、学校名やメールアドレスなどの簡単な登録をすると、ダウンロードができるようになっている。

(2) 文型の理解はイメージで

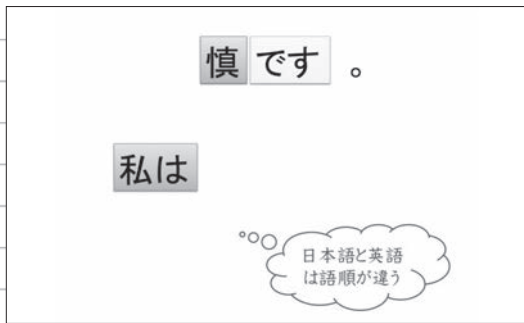
次に、文型の指導例を紹介する。英語と日本語で語順が違うという基本的な文型指導だ。基本的であるだけに、理屈で説明するよりも、しっかりとイメージを植え付けることをねらいとしたい。そこで、ICTの活用が必要になる。これは、パワーポイントのアニメーション機能を使った実践例だ。

ここで例として使うのは、次に示すようにbe動詞を使ったわずか3語の英文である。上に日本語文、下に英文があり、色の違いはそれぞれの語の対応を表している。



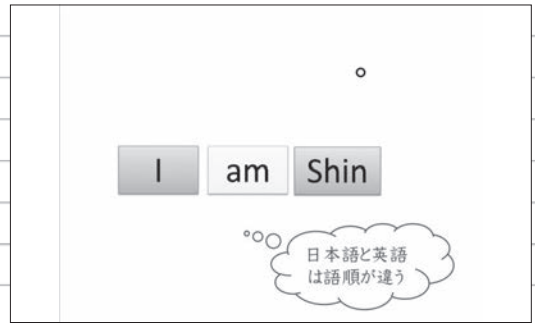
本稿でも、ここの説明はまさに ICT とアナログの差が出る部分である。見せれば数秒で納得させられる動きを、言葉で説明しなければならない。しかも、うまく伝わるかどうかが問われることになる。実際の画面のキャプチャー画像を使って話をすすめよう。

① 「私は」が静かに下へ下りていき、下の行で止まったところで、英語の「I」に変わる。



② 続いて「です」が下へ下りていき、英語の「am」に変わる。

③ 同様に、「慎」が「Shin」に変わり、最後に句点「。」がピリオド「.」に変わる。一連の動きはなめらかに変化させ、ほんの数秒間で終わる。イメージを植え付けるためには、時間をおいて何回も見せておくことも重要だ。



この説明の前提条件は、まず口頭練習をしっかり行っておくことにある。口をついて出た言葉は表現のツールとしては定着しない。ビジュアルでそのイメージを植え付けることによって、「なるほど」と教え込むことは、この口頭練習の次に行われるべき学習である。初めてその文型に触れる初期の学習段階で、いかにわかりやすく詳しく説明を行ったとしても、それは言語の使用には結びつきにくい。つまり、文型や文法の理解の基本は、違っていることに「慣れること」であり、なぜ、どのように違っているのかという言語間の比較を理解することではないし、それを説明できることでもないということである。「私は 慎です。」という日本文も、「I am Shin.」という英文も、全く違和感なく口をついていえる、つまりそれぞれの意味や使われ方を理解して受けとめている生徒にとって、ビジュアルイメージでその文構造についての理解を計ることが有効なのである。

これは1年生の1学期の指導だが、この先にくる疑問文や否定文などの指導も、同様のアニメーションで説明していくことによって、自然な連続した理解が生まれるだろう。

今回は、ICT活用の心構えと、言語活動（ペアワーク）の中での実践例を紹介する予定である。

# Just Now

## 小学校におけるフォニックスの指導 — 音にする力を楽しくつけるために

井村 晃 Imura Akira  
(岐阜県瑞穂市立南小学校 校長)

### 1. はじめに

岐阜大学附属中学校勤務当時、学校・家庭生活、わが町などをテーマにした口頭表現能力の育成や、Phonics の指導を中心に実践していました。この指導を小学校で生かしていこうと、8年前から実践を始めています。

#### (1) 授業のブロック化(帯活動)について

45分間の授業を大きく3つのブロックに分けて、帯活動として学習過程を仕組み、英語の基本的な音(Phonics)をSoundの学習として導入時に取り入れました。毎時間わずか10分程度の学習ですが、このSoundの学習の成果が確実に出ていますので、今回、この紙面をいただいて報告したいと思います。

#### <指導過程>



#### (2) 本校のカリキュラムについて

本校では、口頭による表現能力を育成するために、表に示すような独自のカリキュラムを使用しています。文字が見にくいかも知れませんがお許し下さい。

南小学校5年生 英語カリキュラム

| 内 容                   | 基 本 文                              | サウンド      |
|-----------------------|------------------------------------|-----------|
| 1 オリエンテーション①          |                                    | a · · z   |
| 2 オリエンテーション②          |                                    | a · · z   |
| 3 いろんなあいさつ!           | Nice to meet you.                  | a ~ h     |
| 4 How are you? と聞かれたら | How are you? I'm ~.                | i ~ p     |
| 5 住んでいるところ(自分)        | I live at ~.                       | q ~ u     |
| 6 血液型が言える(自分)         | My blood type is B.                | v ~ z     |
| 7 誕生日が言える(自分)         | My birthday is January 1st.        | at   and  |
| 8 好きなスポーツ(自分)         | I like soccer.                     | ate   ade |
| 9 好きな教科(自分)           | I like Japanese.                   | ap   ape  |
| 10 [英語ノート Lesson 8]   | I study Japanese. 1                |           |
| 11 [英語ノート Lesson 8]   | I study Japanese. 2                |           |
| 12 年齢が言える(自分)         | I'm ~ years old.                   | ab   ad   |
| 13 好きな食べ物(自分)         | I like apples.                     | ant   it  |
| 14 [英語ノート Lesson 4]   | I like apples.                     |           |
| 15 性格について言える(自分)      | I am talkative.                    | id   ig   |
| 16 持ち物について言える(自分)     | I have a bicycle.                  | ick   ite |
| 17 [英語ノート Lesson 5]   | I don't like blue.                 |           |
| 18 年齢が言える(家族) 1       | My father is 40 years old.         | ike   ide |
| 19 年齢が言える(家族) 2       | My grandmother is 60 years old.    | ire   all |
| 20 血液型が言える(家族)        | My father's bloodtype is B.        | ain   ale |
| 21 [英語ノート Lesson 7]   | What's this?                       | ea   ean  |
| 22 誕生日が言える(家族) 1      | My mother's birthday is april 1st. | ee   eet  |
| 23 誕生日が言える(家族) 2      | My brother's birthday is June 2nd. | eat   ell |
| 24 好きなスポーツ(家族)        | My father likes golf.              | en   edge |
| 25 [英語ノート Lesson 6]   | What do you want?                  | ess   ot  |
| 26 好きな食べ物(家族)         | My mother likes melon.             | od   ong  |
| 27 [英語ノート Lesson 9]   | What would you like?               | ot   ot   |
| 28 性格について言える(家族) 1    | My sister is talkative.            | ote   off |
| 29 性格について言える(家族) 2    | My father is kind.                 | ofe   ack |
| 30 持ち物について言える(家族) 1   | My brother has a camera.           | ake   age |
| 31 持ち物について言える(家族) 2   | My father has a nice car.          | ie   ind  |
| 32 自分の住んでいる町          | What is Sunami famous for?         | ar   are  |
| 33 瑞穂市の紹介             | What is Mizuho famous for?         | ir   air  |
| 34 自己紹介ができる(1)        | 既習の文型                              | ass   ase |
| 35 自己紹介ができる(2)        | 既習の文型                              | ool   oon |

### 2. Sound の学習

英語の音は、初めて英語を学習する小学生にもわかりやすく、興味をもって学習しています。従来は、a, b, c, d のアルファベットを [エイ] [ビー] [シー] [ディー] と指導していましたが、[ア] [ブ] [ク] [ドウ] という、文字が本来持っている音の指導から始めます。最初の数時間は、絵とCDを使って文字が持つ音を楽しく学習します。その後、第7時間目以降、カリキュラムに示してある文字の固まりを教えていきます。もうこの頃になると、未知の単語を1文字1文字つなげて類推する児童も見られ始めます。中間評価で、英語の授業に対するうれしい感想がありましたので、紹介させていただきます。



[具体的な絵の提示]



[Soundの指導]

[Aさんの生活ノートより]

今日の2時間目に、教頭先生の英語がありました。教頭先生が英語が得意で、…(中略)…その後に単語の読み方を練習しました。自分が思っているのと違う言い方だ。…(中略)…授業が終わった時は「もう終わりか」と思いました。

Soundの指導は、毎時間10分程度です(＜指導過程＞を参照)。年間のトータルでは5時間強となります。帯活動として少しずつ継続することが重要ですが、この指導によって、はたしてどのような成果があったのかを、データで紹介します。

### 3. Soundの学習の成果

Soundの指導を毎年高学年で実施していますが、前任校での6学年の学習成果を紹介します(表を参照)。

＜Soundの学習の成果＞

平成20年5月7日(第1回目)、10月22日(第2回目)実施

|            | Aクラス |      | Bクラス |      | Cクラス |      | Dクラス |      |
|------------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|            | 第1回  | 第2回  | 第1回  | 第2回  | 第1回  | 第2回  | 第1回  | 第2回  |
| ① infest   | 14.3 | 21.2 | 8.6  | 44.1 | 5.7  | 32.4 | 5.7  | 54.5 |
| ② parks    | 11.4 | 24.2 | 5.7  | 38.2 | 8.6  | 26.5 | 8.6  | 48.5 |
| ③ hostel   | 14.3 | 18.2 | 5.7  | 41.2 | 2.9  | 29.4 | 5.7  | 33.3 |
| ④ temporal | 5.7  | 9.1  | 0    | 20.6 | 0    | 11.8 | 2.9  | 24.2 |
| ⑤ clot     | 11.4 | 18.2 | 2.9  | 23.5 | 0    | 26.5 | 2.9  | 24.2 |
| ⑥ bloom    | 0    | 27.3 | 5.7  | 35.3 | 5.7  | 32.4 | 2.9  | 39.3 |
| ⑦ antic    | 8.6  | 27.3 | 11.4 | 41.2 | 8.6  | 32.4 | 11.4 | 42.4 |
| ⑧ flog     | 25.7 | 30.3 | 25.7 | 50.0 | 11.4 | 44.1 | 14.3 | 54.5 |
| ⑨ spoil    | 11.4 | 6.1  | 2.9  | 29.4 | 2.9  | 14.7 | 0    | 30.3 |
| ⑩ manad    | 5.7  | 12.1 | 5.7  | 11.8 | 2.9  | 2.9  | 0    | 15.2 |

(読むことができた児童の割合[%] 対象：6年児童 140名)

# Detective or Good Communicator?

**Michael Carr** (Institute for English Communication)

Picture the following: a man is standing in a line. When he gets to the front of the line, a woman smiles, greets the man and asks him several questions. The man points to a sign on the wall behind the woman. The woman nods her head.

Where is the man? It is difficult to say for certain, but we can probably assume that the man is in some sort of store or bank or perhaps even a government office. Now, let's imagine that we hear the woman say, "And is that for here or to go?" at the end of the conversation.

Now it becomes clear that the man is in a fast food restaurant. We did not need to hear the whole conversation or see the complete setting to know this. Like a good detective, all we needed were a few clues to solve the mystery.

As we process information, we naturally make assumptions and fill in the blanks of our understanding based on clues. Not only do we connect the dots to make sense of what we hear and see, we also try to predict what might come next.

This is a very important skill as it allows us to navigate uncertainty and make educated guesses. Sometimes our assumptions turn out to be wrong; but more often than not, they are correct.

Now let's imagine that you are the person in the line. You are, however, in a foreign country and you do not speak the language very well. Once you arrive at the head of the line, you know that you will be asked several questions. How do you prepare?

First, you will do your best to imagine what you will say in advance so there will not be any surprises. Secondly, you will try to predict the kinds of things you might be asked. If you

have time, you might even look up a few words in your dictionary before entering the shop.

Whatever your method, you will most certainly prepare yourself and try to predict what type of language you will hear. And as you interact with the cashier, you will use this information as well as your deduction skills to successfully complete the transaction.

Teachers of foreign languages know only too well the importance of prediction and deduction skills for their students. And, as with all abilities, practice makes perfect. Luckily there are many types of interesting activities that allow students to practice their detective skills.

In my classes, I try to give students time to think about a topic and activate their vocabulary before we explore it in depth. Before listening exercises, I tell the students the topic of the text and have them brainstorm words related to it. I also have the students read the questions and imagine answers.

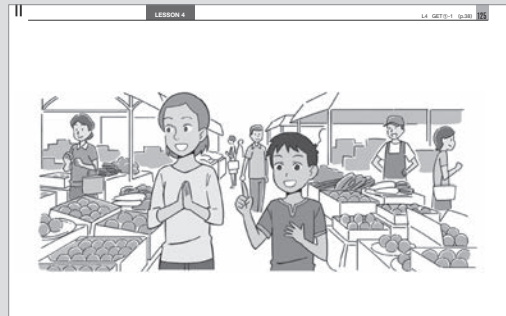
During reading and writing activities, I sometimes give students only the first half of the dialogue from the text. Students must imagine the ending. For an easier challenge, I create a fill-in-the-blank exercise using the text. Before reading, the students must predict what the missing words are.

There are many techniques and activities that can be used to help our students develop their language detective skills. The main thing is to make students aware that they don't have to understand every word, but instead can make educated guesses and predictions.

And the final piece of advice for our students: trust your instincts and don't be afraid to take a chance. All the best language detectives do!

## 「ピクチャーカード」を 使ってみよう

日 臺 滋 之 Hidai Shigeyuki  
(玉川大学)



平成 24 年度版 NEW CROWN「ピクチャーカード」(三省堂)より

### 1. ピクチャーカードとは

ピクチャーカードは、教科書の内容や状況を視覚化した絵や写真をカードにしたものです(サイズは B3 または B2)。本文の Oral Introduction, 内容理解, 言語材料の導入, ドリル, 言語活動など, 授業展開に幅広く活用できます。カードの表には絵が, 裏には絵に対応した教科書の本文, Listening Input の英文, 練習問題(と解答)があります。

### 2. ピクチャーカードの特色

(1) 本文の内容を理解するためのピクチャーカード

- ① 教科書本文のイラストだけでなく, narrative に合わせて, または dialog に合わせて, それぞれの内容を表す絵が豊富にカード化されています。
- ② 題材内容によっては, その補充資料として, 写真やイラストが追加されています。
- ③ 題材内容によっては, さらに生徒に発展的な知識を与えることができる資料がピクチャーカードとして用意されています。

(2) ドリル活動のためのピクチャーカード

基本文を覚え, 文構造・文法を身につけるために, ドリル活動(Drill)の絵が用意されています。

(3) 自己表現活動のためのピクチャーカード

本文のさし絵や, 各セクション(Part)に設けられている語彙コーナー(Word Corner)の絵以外の絵が, さまざまな表現活動に使えるように, ピクチャーカードの最後にカテゴリーごとにまとめて用意されています。(1年: ① 1日の行動, ② 身の回りのもの, ③ 部活動 / 2年: ① 職業, ② 余暇の過ごし方 / 3年: ① 活動・行動, ② 学校行事, ③ 日

本文化, ④ 日本の行事)

### 3. ピクチャーカードの活用例

(1) 本文の内容を理解するためのピクチャーカード  
教科書の内容の Oral Interaction に使用するだけでなく, 生徒の表現活動を伸ばすために活用します。

① 生徒同士のペアワークでの活用

本文の音読や, Read and Look up を終え, 本文の内容が頭に入ったころ, ピクチャーカードを縮小して作成したワークシートを用いて, ペアになった相手に話す活動に利用することができます。

② ALT とのスピーキングテストでの活用

ピクチャーカードを使って, 教科書の英文の内容を ALT に話すスピーキングテストに活用することができます。

(2) ドリル活動のためのピクチャーカード

文法の導入から練習までをカバーできます。Drill のピクチャーカードでは, 1 Listen で, 教師は新出文法事項を導入し, 生徒に意味を確認します。2 Repeat で, 生徒に文法事項の英文を教師の後をつけて言わせます。3 Say で, 生徒はカードを見て, 自分で英文を言う練習へと進みます。最後に 4 Write で, 生徒は自分の言った英文を書いてみます。

(3) 自己表現活動のためのピクチャーカードの活用

2年5課 Get Part 1 の Practice では, 「Word Corner—職業(job)」のピクチャーカードに, 「2年①職業」のピクチャーカードも合わせて活用することによって, 生徒の生活語彙を増やし, 自己表現活動を伸ばすことができます。



お知らせ

日本で一番売れている国語辞典  
7年ぶりの全面改訂版!



新発売

[並版(赤)・特装版(白)] B6判  
1,728頁・2色刷・3,150円(3,000円+税)

SINMEIKAI  
山田忠雄 柴田 武  
酒井憲二 倉持保男  
山田明雄 上野善造  
井島正博 笹原宏之

# 新明解 国語辞典 第七版

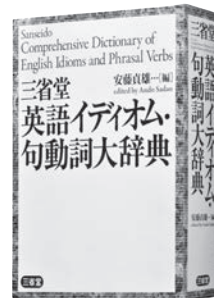
## 三省堂 英語イディオム・ 句動詞大辞典

圧倒的な項目数と  
豊富な用例数を誇る  
決定版!

安藤貞雄[編]

A5判 上製クロス装 1,856頁 14,175円(13,500円+税)

シェイクスピア以降、現代英語に至るまでの英語イディオム・句動詞・諺などを集大成。  
総項目約8万5千、用例約8万は、内外で最大級。用例作成には各種コーパスを活用。  
句動詞はロゴで示し、明確に可視化。異形・反意句・同意句を併記。内容見本、進呈。



## 英語検定教科書

制度、教材、そして活用

小串雅則[著] A5判 208頁 2,310円(2,200円+税)

文部科学省外国語科主任教科書調査官・視学官を歴任した筆者が、自らの経験と研究成果を集大成。学習指導要領の歴史をひもとく、教育行政、教科書検定・採択制度、教科書の活用と授業実践に至るまで、丁寧に説いた待望の書。



TEACHING  
ENGLISH  
NOW

22号

2012年  
1月31日発行  
定価 80円  
(本体 76円)

編集・発行人：北口克彦  
発行所：株式会社三省堂  
〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14  
電話 (03) 3230-9422(編集)  
振替 東京 00160-5-54300  
[NEW CROWN ホームページ]  
http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html  
印刷：三省堂印刷株式会社  
〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9  
電話 (042) 645-6111(代)

### 編集後記

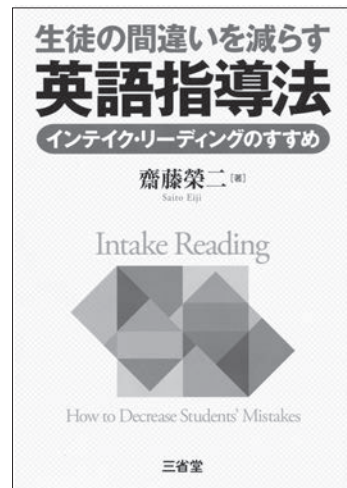
秋はきこの図鑑をのぞく機会が増えます。そこでふと気になったのが、「図鑑」を英語でどう言うかということ。多くの和英辞典には、an illustrated (a pictorial) bookとありますが、これでは要領を得ません。ある分類システムにもとづいて項目を配列した知的なツールとしての「図鑑」であれば、a visual dictionaryとでも呼びたい気がします。(tor)

# 生徒の間違いを減らす 英語指導法

インテイク・リーディングのすすめ

齋藤榮二 [著] 四六判 216頁 2,100円 (2,000円+税)

ドリル練習からコミュニケーション活動をすぐに取り組みだけでは文法は定着しない。生徒にどんなに自己表現をさせようとしても、書く文章が間違いだらけでは話にならない。生徒の間違いを減らすために、導入した英文を体の中に染み込ませる方法「インテイク・リーディング」を提案する。



# 推論発問を取り入れた 英語リーディング指導

深い読みを促す英語授業

田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸 [編著]

A5判 200頁 2,310円 (2,200円+税)

テキストに書かれた情報をもとに筆者の意図や登場人物の心情などを推測させる「推論発問」は、英語リーディング指導を活性化する。「推論発問」の原理と指導法を、中学校・高校の教科書を素材に豊富な実例をあげて、新しい時代のリーディング指導を提案する。



# 学習言語とは何か

バトラー後藤裕子 [著]

A5判 344頁 3,045円 (2,900円+税)

近年、第二言語学習者、母語話者ともに「学習言語」の習得が不十分なために、授業についていけない児童・生徒が増えている。日米の研究や事例を紹介しながら、教科教育で使われる言語のあり方を考える。



# 新課程でも抜群の安心感! 中学用学習英和・和英のトップセラー!

## 初級クラウン英和辞典 第12版

田島伸悟・三省堂編修所 [編] B6変型判 768ページ 巻頭カラー〈2色刷〉  
1,785円(本体価格1,700円+税) CD付き 1,838円(本体価格1,750円+税)

どの中学校  
英語教科書  
にも  
使えます!

- ★教科書の学習と高校入試に万全 ★重要なことがひとめでわかる
- ★圧倒的に豊富な用例(約2万)、参考書のように丁寧な説明で英語の基礎、基本が確実に身に付く。
- ★すぐに使える英会話例も充実

## 初級クラウン和英辞典 第10版

田島伸悟・三省堂編修所 [編] B6変型判 624ページ 巻頭カラー〈2色刷〉  
1,785円(本体価格1,700円+税)

- ★教科書の学習と高校入試に万全 ★英語教育に役立ち知識が身に付く多彩なコラム
- ★自己表現に必要な語彙を補う、約1万8,700用例を収録
- ★英語らしい表現を広げる **ひゅ** ロゴを新設 ★すぐに使える英会話例も充実

## 初級クラウン英和・和英辞典 第10版

田島伸悟・三省堂編修所 [編] B6変型判 1,392ページ 巻頭カラー〈2色刷〉 CD付き  
3,255円(本体価格3,100円+税)

内容を充実  
させながら  
約30%軽量  
スリム化!



**三省堂**

<http://www.sanseido.co.jp/>

- |                                |   |                                    |
|--------------------------------|---|------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 本社    | 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14            | TEL. 03 (3230) 9411 (編集)・9412 (営業) |
|                                |   | TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)     |
| <input type="checkbox"/> 大阪支社  | 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地 2-5-3              | TEL. 06 (6341) 2177                |
| <input type="checkbox"/> 名古屋支社 | 〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F       | TEL. 052 (252) 9211・9212           |
| <input type="checkbox"/> 九州支社  | 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1                | TEL. 092 (531) 1531・1532           |
| <input type="checkbox"/> 札幌営業所 | 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 3F | TEL. 011 (616) 8722                |